



2010年 8月15日 日曜日
(平成22年) 【旧7月6日・赤口】

発行所 那覇市おもろまち1丁目3番31号
(郵便番号900-8678) 沖縄タイムス社
私書箱 那覇中央郵便局293号©沖縄タイムス社 2010年
電話代表 (098)860-3000
読者センター (098)860-3663

HP <http://www.okinawatimes.co.jp/>

石垣焼、盆栽と美の共演

【石垣】土とガラスを融合させ、沖縄の海の青を発色させた陶器「石垣焼」を製造、販売する市名蔵の「石垣焼窯元」(金子晴彦当主)が世界遺産の日光東照宮で開かれる盆栽展「日本大宝樹展」(9月20日～10月4日)に2尺大皿「沖縄の海」と「碧海木の葉天目茶碗」の2品を出展する。盆栽の「山」と陶器の「海」との共演に当たり、金子当主(49)は「外国人も数十万人訪れるイベント。地球環境の大切さをアピールし、石垣焼が沖縄や石垣島を訪れるフック(引っかけ)になれば」と言っている。

窯元の金子さんが制作



2品 日光東照宮で展示へ

「徳川家康公400周年プレイベント」として初開催される同展では、複数の盆栽協会や組合から、団体の垣根を越えた銘品100点が展示される。

発起人で日本宝樹会代表の葉坂勝氏が石垣焼に注目していたことから、7月の実行委員会で共同展示が決まった。



泥土のミネラルが透明のガラスに溶けて発色する青色などの微細な変化が美しい石

垣焼。金子当主によると、陶器が冷却時に縮もうとする力と、熱して膨張したガラスの突っ張る力とのバランス調整は大物になるほど難しく、2尺大皿はこの10年で8枚しか成功していないという。

石垣島のクワの葉を焼き付けた「木の葉天目」については、400度で灰になる木の葉と1300度で溶けるガラスの異なる性質を一つの器で表現したのが特長で、「2年間で1200個失敗した。世界で1個しかない」と話す。

2000年に亡くなった父の恭雨さん(享年76)の窯を受け継いだ金子当主。

「文化財や国宝のコピーではなく、新しい物を創造したい」と2年前から工夫を重ねてきた。「石垣島の材料を生かし、数千年も残るような作品を作りたい」という意欲を燃やしている。

①「自然の大切さと石垣島をアピールしたい」と出品を喜ぶ金子当主―市名蔵・石垣焼窯元
②2尺大皿「沖縄の海」
③碧海木の葉天目茶碗

